

報道関係各位

キュラトリアルシンポジウム

家鳴

YANARI (Rattling A House):

Curatorial Symposium on Media, Spiritual and Geopolitical Worldmaking

2025年5月31日(土) 13:00~18:00(開場12:30)・6月1日(日) 13:00~17:00(開場12:30)

会場: 東京都写真美術館 1階ホール



Visual Design by Tezzo Suzuki

「家鳴」は、見えない存在の残響を通して、映像メディア、展覧会、地政学のもつれを探求する2日間のキュラトリアルシンポジウムです。ソウル市立美術館のパートナー事業として、上映会やパフォーマンスな講演と学術パネルを融合させ、創造的なアンラーニングを推進する0-eAが主催しています。

- 第13回ソウル・メディアシティ・ビエンナーレ芸術監督キュレーションによる上映会とトーク
- 恵比寿映像祭関係者を交えたソウル↔東京2都市間における議論の共有
- 1970年大阪万博を間-領域的な視点から論じるインターアジアの展覧会史
- 冷戦下のイデオロギーから文化外交として捉え直す美術史の再考
- パフォーマンスな講演と学術パネルによる感性的で知的な解釈の場
- シンポジウムの参考資料となる小論考集「公共なき実践」のPDF出版

ぜひ本プログラムにご関心をお寄せいただき、貴媒体にてご紹介賜りますようお願い申し上げます。

広報資料ダウンロード: <https://shorturl.at/38Dq6>

ウェブサイト: <https://0-ea.art/journeys/yanari/index.html>

概要

「家鳴(やなり)」は、目に見えない存在の残響を手がかりに、映像メディア、展覧会、そして地政学のもつれ合いを探る二日間のシンポジウムです。現代アートをかたちづくる言説の流通やその仕組みを問い直すキュラトリアル(注1)な視点のもと、アーティスト、キュレーター、美術史家が一堂に会し、言説の断絶や歴史の残滓を掬い上げる議論に取り組みます。映像作品の上映、パフォーマンスな講演、学術的なパネルディスカッションを通じて、東アジアに焦点をあてたスクリーンプラクティス、展覧会史や地政学的な想像力における物質的・情動的な不安定さに対し、キュラトリアルな実践がいかに応答しうるのかを考察していきます。

2025年5月31日 [土]

セッション1: 靈魂のテクノロジー

セッション1は、第13回ソウル・メディアシティ・ビエンナーレ芸術監督による講演と上映会に始まります。「交霊会 (séance)としての展覧会」と呼ぶ試みでは、通常の知覚を超えた認識領域との交信を試みてきた人類の長い歴史に着目し、それがアート制作の言語と方法をいかに変容したかを概観します。こうした靈魂の代替的なテクノロジーの隆盛は、社会的・政治的な変革期と相関しており、その時代に付随する不安や疎外感などへの反応として解釈できるでしょう。その後、日本側の批評家による応答に続き、ビエンナーレと恵比寿映像祭関係者による対話が行われ、制度と企画のはざまに揺れるそれぞれの歴史と課題が共有されます。

13:00~13:05	趣旨説明	SeMA, 0-eA
13:10~16:10	[プレゼンテーション+上映会] 「アート、死、スピリチュアリティー」 「不在のメディア: 靈魂・シネマ・精神分析にみる交霊会」 「テクノ神秘主義とその不満」	アントン・ヴァイドクル ルーカス・ブラシスキス ヘイリー・エアーズ
16:15~16:45	[応答] 「降霊術のレトリック(民藝と霊媒)」 <i>The Rhetoric of Séance (Mingei as Mediums)</i> 休憩 (10分)	沢山遼
16:55~17:55	[パネルトーク] 制度と企画のはざままで: 実験とオルタナティブに向けて <i>Between Institutions and Projects: Towards Experiments and Alternatives</i>	権辰 (クオン・ジン) 田坂博子 馬定延 (マ・ジョンヨン) [進行]
17:55~18:00	クロージング	SeMA, 0-eA

2025年6月1日 [日]

セッション2: 「自由世界」の幻想

パフォーマンスな講演と学術的考察を交差させながら、本セッションでは、20世紀半ばの東アジアにおいて、文化的かつ美的な文脈の形成がイデオロギーの断層線上にいかんして形成されてきたかに目を向けます。戦中から冷戦への移行期における児童書、知識層向け雑誌、外交資料や写真作品など、争点となるアーカイヴを再訪し、ドキュメンテーション、プロパガンダ、歴史の忘却といった互いに境界が浸透しあう領域を、異なるケーススタディーから検証していきます。「自由主義陣営」の幻影は、いまなお芸術界をさまよい、香港、台湾、韓国、日本といった国々の芸術実践や解釈の枠組みに影響を与え続けているのです。

13:00～13:30

李繼忠 (リ・カイチュン)

パラダイス読解: 剥き出しの生、児童書、香港の文化冷戦
*Reading Paradise: On Bare Lives, Children's Books,
 and the Cultural Cold War in Hong Kong*

13:30～13:40 各セッションの主題導入

大坂紘一郎

13:40～15:00 [パネルトーク]

拡張した前線と多孔的なアーカイヴ
Expanded Frontlines and Porous Archives

金炫辰 (キム・ヒュンジン)
 郭昭蘭 (ゴ・ジャウラン)
 藤井光
 飯岡陸 [進行]

* パネルトークは、藤田嗣治による油彩画を囲んで行われます。

セッション3: 博覧会のレガシー

最終セッションでは、アジア地域の展覧会史における分水嶺として、1970年大阪万博を取り上げます。先進テクノロジーへの楽観主義を掲げた万博は、同時に近代性に相反するヴィジョンや、変化する政治的連携の現状を明るみにしました。アート、建築、デザイン、文学、科学技術の前衛的な実践者と体制側が協働し、大衆の願望と国家の課題を体現しながら、新たな展示形態が沸きおこる実験場となったのです。大阪万博が国外のアーティスト、知識人、キュレーターの習慣に与えた影響を探り、今日の「グローバル」な展覧会制度をかたちづくることとなった契機、国境を越えた交流や言説の転換について論じます。

15:10～16:50 [パネルトーク]

アジア地域の展覧会史における1970年大阪万博 (仮題)
Expo '70 in Asian Regional Exhibition Histories (Title TBD)

デビッド・テ
 グレース・サンボーク
 キャスリーン・ディッツィ
 苏佳敏 (ソ・ケイミン)
 池田佳穂 / 大坂紘一郎 [進行]

16:50～17:00 クロージング

0-eA

本シンポジウムの開催にあわせて、パトリック・D・フローレス、ゲシヤダ・シレガル、サイモン・スーンによる批評テキストの翻訳を収めた、キュラトリアル実践に関する小論集『公共なき実践: 間-地域のキュラトリアル私研究に向けて』(飯岡陸・池田佳穂・大坂紘一郎 共編)が無料のPDF資料として0-eAのウェブサイトにて公開されます。

家の構造体がわけもなく音を立てる怪奇現象を指す「家鳴」というタイトルは、目に見えない力が居住空間を攪拌し、物理的なインフラストラクチャーだけでなく、その内に刻まれた心理的・政治的秩序までもを揺らがせる状況を示しています。本シンポジウムは、古いインフラの軋みを聞きながら、世界を揺るがし続ける亀裂のなかに身を置かざるをえない現在の居場所について問いかけています。

キュラトリアルシンポジウム「家鳴」は、アーツカウンシル東京、韓国文化芸術委員会の助成、ならびに国立アートリサーチセンターの特別協力を受け、ソウル市立美術館(DAY1)との企画連携と研究プロジェクト「Temperature of Roses」(DAY2一部)との協調のもと、一般社団法人0-eAが企画・主催しています。

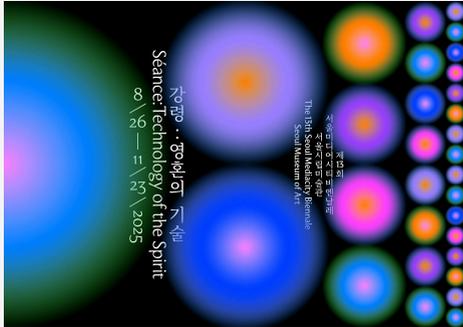
注1: キュラトリアルスタディーズは、展覧会をめぐる政治性、作品が公共に触れる枠組み、文脈、言説を問い直し、キュレーションという行為に内在する力関係を批判的に検証する学際的な分野。参照: Raunig, G. & Sheikh, S. (eds.) *Art and Contemporary Critical Practice: Reinventing Institutional Critique*. London: MayFly Books, 2009. pp.16-20.

シンポジウム初日に関する補足資料

第13回ソウル・メディアシティ・ビエンナーレ

会期：2025年8月26日(火) - 11月23日(日)

公式サイト：https://mediacityseoul.kr/2024_en/



SMB13 Identity, 2025. Design: nonplace studio. Courtesy of the Seoul Museum of Art

1996年から1999年にかけて3回開催された前身展「SEOUL in MEDIA」を皮切りに、2000年から名称を改め、時代に共鳴するアイデアや活動をかたちにしてきたソウル・メディアシティ・ビエンナーレ。毎回、約50組の参加アーティストがプロジェクトのテーマに呼応しながら現代の課題に取り組む作品を発表し、各ビエンナーレ期間中に約14万人の来場者を集めています。第13回となる本年はアントン・ヴァイドクル、ルーカス・ブラシスキス、ヘイリー・エアーズの3名が芸術監督に選ばれ、「séance」(交霊会)をキーワードに、資本主義近代の加速主義的・合理主義的論理に対抗するオカルト、神秘主義、スピリチュアルな伝統に基づく、過去から現在に至る各国のアーティストの作品が展示されます。本シンポジウムのセッション1は、2月にニューヨークで行われた「Notes for a Séance」に続く講演となり、6月中旬のベルリンのICI (Berlin Institute for Cultural Inquiry) での発表に引き継がれ、巡回する予定です。

詳細：<https://www.ici-berlin.org/events/notes-for-a-seance/>

上映作品



Anton Vidokle: *Citizens of the Cosmos*, 2019 Courtesy the artist

アントン・ヴァイドクル《宇宙市民》2019

スヴァトゴールの『生物宇宙主義者の宣言』(1922)に着想を得た本作は、不死、復活、そして惑星間存在というロシア宇宙主義の理念を探求する共同体を、詩的かつ儀式的な映像で描く。脱領土化されたコスミズムが異なる文化圏においていかに再構成され得るか示す本作は、スピリチュアルな探究が死生観や政治的想像力に交差するヴァイドクルの継続的な実践を示す。



Jane Jin Kaisen, *Wreckage*, 2024. Video still. Courtesy of the artist

ジェーン・ジン・カイスン《残骸》2024

《残骸》の水の中映像は、米軍制作のプロパガンダ映画に重ねて荒れ狂う海を映し出す。1945年10月に済州島で撮影されたこの映像は、日本軍が残した大量の武器と大砲の山を兵士が船に積み込み、海に投棄する様子を描く。数年後、在朝鮮アメリカ陸軍政庁統治期に済州島四・三事件が起こる。夥しい数の市民が殺され、海に投げ込まれ、船で島からの脱出を試みた。カイスンがそのシャーマン修行を記録した故コ・スナーンの嘆きの中で回想される。



Maya Deren, *Ritual in Transfigured Time*, 1946. Video still. 16mm transferred to digital. Courtesy of Re:Voir, Paris, for Tavia Ito, Maya Deren estate

マヤ・デレン《変形された時間での儀礼》1946

日常の動作と儀式的な所作のあいだの流動性を探求する映画監督マヤ・デレンによる短編実験映画のひとつ。スローモーションやモンタージュ、象徴的な振付を用いて、社交的な出会いが次第に超現実的な儀式へと変容していく様子が描かれ、アイデンティティや移行、時間性といった主題が浮かび上がる。モダンダンスと精神分析的思考に影響を受けた本作は、映画を内面的経験や神話的な次元へと導く媒体と捉えるデレンの姿勢を体現する。



Shana Moulton, *Whispering Pines 9*, 2009. Video still. Courtesy of the artist

シャナ・モールトン《Whispering Pines 9》2009

自己啓発文化の複雑さ、精神的な意味の探求、個人的な健康法の儀式的なしばしば滑稽な不条理を掘り下げながら、現代人の精神のニュアンスを探求している。自分の分身であるシンシアの体験を通して、モールトンは個人的でありながら普遍的な響きを持つ物語を書き、グローバルなデジタル資本主義の時代における日常と神秘的境界を探る。(本作と合わせて、シャナ・モールトン《MindPlace ThoughtStream》(2014, 12 min)も上映されます。)

登壇者略歴



アントン・ヴァイドクル

アーティスト、映像作家、e-flux創設者。ドクメンタ(ドイツ)、ヴェニス・ビエンナーレ、光州ビエンナーレ(韓国)、日本国内では岡山アートサミット2016や横浜トリエンナーレ2020などに参加。第14回上海ビエンナーレ共同芸術監督。



郭昭蘭(ゴ・ジャウラン)

キュレーター、美術史家。台北芸術大学准教授。ボリス・グロイス『アート・パワー』を中国語に翻訳(藝術家出版社, 2015)。芸術の回遊、循環、美術史学、展覧会がいかに歴史を作るかをテーマに研究を行う。



ルーカス・ブラシスキス

映画研究者、キュレーター。近著に『Cinema and the Environment in Eastern Europe』(共編著, Berghahn Press, 2023), 『Jonas Mekas: The Camera Was Always Running』(共編著, Yale University Press, 2022) など。第14回上海ビエンナーレ共同芸術監督。



藤井光

アーティスト。特定の歴史的瞬間や社会問題を出発点とし、リサーチやフィールドワークに基づいた実践を行う。アジア・パシフィック・トリエンナーレ(2021)、アール国際写真フェスティバル(2024)などの国際芸術祭にも参加。



ヘイリー・エアーズ

キュレーター、研究者、美術史家。スピリチュアルな信仰体系を通じた土着的な知識と西洋的な知識の融和などについて執筆、講演を行う。第14回上海ビエンナーレ共同芸術監督、e-fluxアソシエイト・ディレクター。



飯岡陸

キュレーター、横浜美術館学芸員。主な論考に「批評としての《ケア》」(『美術手帖』2022年2月号)、「分水嶺としての現在地—進藤冬華と宇多村英恵」(『ART IT』, 2022) など。昌原彫刻ビエンナーレ2024「silent apple」(韓国)に co-thinker of gudeulとして携わる。



沢山遼

美術批評。武蔵野美術大学美学美術史研究室准教授。著書に『絵画の力学』(書肆侃侃房, 2020)。共著に、国立新美術館編『今、絵画について考える』(水声社, 2023)などがある。



デビッド・テ

ライター、キュレーター、シンガポール国立大学准教授として東南アジアの近現代美術を研究。主な著書に『Thai Art: Currencies of the Contemporary』(MIT Press, 2017)など。本年のタイランド・ビエンナーレの共同芸術監督。



權辰(クワン・ジン)

ソウル美術館学芸員/Media City Seoulプロジェクトディレクター。美術史専攻ののちデジタルカルチャーで修士号を獲得。2007年から2009年までARKO アートセンターにて勤務し、南米や中東の現代美術を紹介。2016年より現職。



グレース・サンボー

インディペンデント・キュレーター。キュレーション、リサーチ、執筆活動を通じて、過去の社会的現実を紐解き、現代の実践へと位置づける。Hyphen、RUBANAH Underground Hubに所属。



田坂博子

東京都写真美術館学芸員/恵比寿映像祭キュレーター。主な企画に「風景論以後」(2023)、「エクスパンデッド・シネマ再考」(2017)、「アピチャップン・ウィーラセタクン 亡霊たち」(2016-17)、「高谷史郎 明るい部屋」(2013-14)など。



キャスリーン・ディッツツイ

シンガポール・ナショナル・ギャラリー学芸員。文化政策に携わった経験から、資本主義、テクノロジー、国際関係といった世界史との関連で近現代の東南アジア美術を研究。2021年にIMPARTキュレーターアワードを受賞。



馬定延(マ・ジョンヨン)

関西大学文学部映像文化専修教授、国立国際美術館客員研究員、韓国『月刊美術』東京通信員。著書『日本メディアアート史』(2014)、共編著書『SEIKO MIKAMI: 三上晴子-記録と記憶』(2019)、論文「この領土の芸術、この芸術の領土—ホー・ツーニエンの『日本三部作』をめぐって」(2023)など。



苏佳敏(ソ・ケイミン)

戦後東南アジアを取り巻く天候、元素美学、政治的生態学に関心を寄せるライター、研究者。ウェストミンスター大学CREAM (Centre for Research and Education in Arts and Media)の博士課程研究員。2022年第17回イスタンブール・ビエンナーレアシスタント・キュレーター。



李繼忠(リ・カイチュン)

アーティスト。地政学、植民地性、そしてその感情的影響力のもつれに関する芸術的研究を行なっている。自身の植民地時代とポストコロニアル時代の生活体験から、歴史的・政治的抑圧を迂回するための実践としての逃亡とその存在を考察している。



池田佳穂

インディペンデント・キュレーター。東南アジアを中心に、コレクティブとDIYカルチャーを調査。山中suplex共同プログラムディレクター、アートセンター-BUG および「神戸六甲ミーツ・アート2024 beyond」ゲストキュレーター。



金炫辰(キム・ヒュンジン)

仁川アートプラットフォーム芸術監督。KADISTのアジア担当リード・キュレーター。第58回ヴェネチア・ビエンナーレ(2019)韓国館キュレーター。主な企画に「2 or 3 Tigers」(HKW, 2017, アンセルム・フランクとの共同キュレーション)など。



大坂 紘一郎

キュレーター。2015年プロジェクトスペース ASAKUSA、2023年にはキュラトリアル研究の場として一般社団法人0-eAを設立。「機械の中の亡霊(ICAを考える)」(e-flux, 2019)ほか。2025年よりシンガポール国立大学比較アジア研究博士課程。

開催概要

タイトル :キュラトリアルシンポジウム「家鳴」

YANARI (Rattling A House): Curatorial Symposium on Media, Spiritual and Geopolitical Worldmaking

登壇者:アントン・ヴィドクル
 ルーカス・ブラシスキス
 ヘイリー・エアーズ
 沢山遼
 権辰 (クオン・ジン)
 田坂博子
 李繼忠 (リ・カイチュン)
 金炫辰 (キム・ヒュンジン)
 郭昭蘭 (ゴ・ジャウラン)

藤井光
 デビッド・テ
 グレース・サンボ
 キャスリーン・ディッツィ
 苏佳敏 (ソ・ケイミン)
進行 : 馬定延 (マ・ジョンヨン)
 飯岡陸
 池田佳穂
 大坂紘一郎

会期 :2025年5月31日(土) 13:00~18:00 [開場12:30]・6月1日(日) 13:00~17:00 [開場12:30]

会場 : 東京都写真美術館 1階ホール

住所 : 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

(JR恵比寿駅東口より徒歩約7分・東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩約10分)

定員 :120名

言語 : 英語および日本語(同時通訳つき)

参加料 : 一般 1,200円 / 学生 600円

※5月31日(土)[DAY1]、6月1日(日)[DAY2] 両日参加ご希望の方は、それぞれチケットをお買い求めください。

※入場チケットは当日会場でも若干販売予定ですが、Peatixでレシーバー付きチケットが完売した場合、当日はレシーバーなしチケットのみの販売となります。

申込方法(Peatix): <https://yanari.peatix.com/> (事前予約制・先着順)シンポジウム詳細ページ: <https://0-ea.art/journeys/yanari/index.html>

主催 : 一般社団法人0-eA

企画連携: ソウル市立美術館 [SeMA]

特別協力: 独立行政法人国立美術館国立アートリサーチセンター [NCAR]

助成 : 公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京 [東京芸術文化創造発信助成]、
韓国文化芸術委員会 [Arts Council Korea/ARKO]

協賛 : 株式会社 思文閣、ログズ株式会社

協力 : 東京藝術大学大学院美術研究科グローバルアートプラクティス専攻

広報デザイン: 鈴木哲生

お問い合わせ: 一般社団法人0-eA(代表 大坂紘一郎)

E-mail : mail@0-ea.art